

大学院教員派遣研修での研究内容の概要

所属校	東京都立光明養護学校	氏 名	金 森 克 浩
派遣大学院	東京学芸大学 大学院	専攻・コース	障害児教育専攻 障害児教育講座発達支援方法学分野
研究テーマ	肢体不自由養護学校におけるアシスティブ・テクノロジーセンターの構築と運営に関する研究		

1. 研究の目的（学校における現状、課題、課題を解決するための研究の位置づけ）

障害のある子どもたちへの教育的支援としてアシスティブテクノロジー（以下 AT と示す）の活用については、様々な先行研究からその有効性について論じられてきている。しかし、肢体不自由養護学校のような専門的な教育機関においても、AT の利用の状況は様々で、十分に指導に生かされていない現状がある。まして、地域の学校に通う障害のある児童生徒たちに AT を活用した教育支援を行うためには様々な条件整備が必要となる。そこで、地域の学校への支援の 1 つとして肢体不自由養護学校に AT センターを構築、運営するための必要なサービス内容について検討することを目的とした。

2. 研究内容（方法・経緯・内容等）

これまでに肢体不自由養護学校が AT に関する地域支援をどのように行い、またそのためにどのように条件整備をすればいいかということに関する調査はほとんど行われていない。そこで、まず肢体不自由養護学校における AT の整備状況や利用の状況を把握することとした。それをふまえて、比較的先進的に支援を行っている学校への調査を行うことで、実際にどのようなサービスが行われており、必要なサービスや条件が求められているかについて検討することとした。また、地域支援を行うに際しては、肢体不自由養護学校内の AT 利用とは違ったサービスが求められると予想されるため、小中学校での AT に対する意識やニーズについての調査を行い、現在の状況や必要な要件を考察することとした。さらに、それらのニーズなどを考慮しつつ、具体的に AT センターを構築し運用を行い、その効果を確認することとした。

具体的には以下の調査・実践を行うことにより検討を進めた。

- ① 都内肢体不自由養護学校・小中学校を対象とした AT への理解と知識に関する調査
- ② 現場における AT の活用状況に関する聞き取り調査
- ③ AT サービスの構築と運営に関する実践調査

現在の肢体不自由養護学校では AT を扱う分掌はあるものの、実情としては担当する教員の個人的な力量に左右される傾向が強く、地域支援の体制を作るためには組織的な取り組みが必要とされる。

AT に関する環境の整備としては、情報機器の整備計画で導入されたコンピュータと、それ以外の支援機器などを統合的に管理し、指導に役立てるために管理部署の設置が求められると考える。また、指導内容の洗い出しと、予算計画をすることで、日々更新される情報機器の情報に対応する必要があると思われる。

地域支援に関しては、肢体不自由学級など肢体不自由養護学校以外の教育現場における支援技術の浸透状況等を検討するとともに、より幅広い情報提供の方法について検討していく必要がある。

全国的な相談センターでは、相談を受けるリソースとしてのスタッフには各方面での専門的な教員がいるために、広範囲な対応が可能であるが、逆に学校で開く AT センターには具体的な機器を見に行っ

たり、教育活動を直接見られるなどの利点があり、それぞれの性格の違いが現れる。

また、情報提供のシステムについては、地域の学校に直接おもむいての紹介も必要であるが、直接的に障害のある生徒を担当しない教員にとっては、必要になったときに探せるようなシステムの重要性が示唆された。そこでは、より簡便なシステムとしての web ページの紹介があるが、専門的にならず、一般の教員が見てもわかりやすい構造の web ページが望まれる。また、その後に直接的な機器の展示が出来るような、相談システムの連携が必要である。

具体的な相談の事例では、継続的に相談することの重要性が示唆される。支援機器の活用には個別の障害の状態や学習環境など考慮に入れなければならないため、1回のアセスメントで解決しない例が多いからである。そこで、メールなどネットワークを活用したアフターケアの有効性が確認出来た。

2. 研究成果と課題

障害のある子どもたちへの教育的支援として、様々な先行研究から AT の活用の有効性が指摘されてきている。しかし、肢体不自由養護学校のような専門的な教育機関であっても AT の利用は必ずしも十分ではない場合があることも指摘されている。一方で、今後の特別支援教育の展開により、地域の学校に通う障害のある児童生徒にも AT を活用した教育支援が必要となることも予想される。そこで本研究では、より充実した AT の活用を促し、地域の学校へも支援可能なサービスを提供する AT センターを肢体不自由養護学校に構築、運営するための検討を行った。

最初に AT に関する調査研究を実施し、まず肢体不自由養護学校における AT の利用状況を踏まえた後、先進的な学校を対象としたより詳細な調査を行った。また、地域支援は肢体不自由養護学校内とは異なった状況が考えられるため、小中学校における AT の意識やニーズについても調査を行った。その結果、現在の肢体不自由養護学校において AT を扱う分掌はあるものの、実情としては担当する教員の個人的な力量に左右される傾向が強く、地域支援の体制を作るためには組織的な取り組みの必要性が示された。地域支援に関しては、AT の知識を持っている小中学校は約 3 割と少なかった。理解を深めるための情報源として web ページが期待されており、これを用いたわかりやすい情報提供の方法が有効であると推察された。

次に行った実践研究では、調査研究から確認されたニーズ等を考慮し、実際に AT センターを構築して 1 年間の試験的運用を行い、その効果についての確認を行った。その結果、運営期間中に web ページでの情報提供、相談業務、研修事業が実施できた。web ページでは 6 項目の情報が蓄積され一般に公開された。相談業務では 1 年間に 12 件対応した。その際、個々の障害様相や学習環境等を考慮する必要があるために継続的な対応を行い、中には遠隔地からの相談もあった。そのため、電子メールをはじめとするネットワークが有効に活用できた。研修事業では、教員の AT に対する知識やその利用状況をアセスメントシートにより客観的に評価できることが示され、教員研修用教材としての有効性が示された。

以上の結果は、肢体不自由養護学校における AT センターの有効性を示しているものといえる。より充実した AT センターのサービスを提供するためには、校内組織の位置づけ、情報ネットワークの充実、効率的な情報の整備、わかりやすい指導・技術伝達方法などが重要項目として指摘された。

大学院教員派遣研修成果活用状況

所属校	東京都立光明養護学校	氏 名	金 森 克 浩
派遣大学院	東京学芸大学 大学院	専攻・コース	障害児教育専攻 障害児教育講座発達支援方法学分野
研究テーマ	肢体不自由養護学校におけるアシスティブ・テクノロジーセンターの構築と運営に関する研究		
1 所 属 校 で の 成 果 の 活 用	<p>本研究で明らかになってきた課題等を、研究対象である「支援技術センター」に還元し、特別支援学校としての肢体不自由養護学校の役割について環境整備を行っている。具体的には</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 校内組織（情報教育部）の活動の充実と校内での AT に関するアセスメントの充実 ・ 支援機器等の整備 ・ 学習や生活を支援するための具体的な事例の整理 ・ 校内でのネットワークの整備と外部機関との連携 ・ 校内研修会での啓発 ・ 相談事業 ・ 支援室と連携した相談体制の充実 ・ Web やメールを活用しての情報提供 <p>などを情報教育部を中心として組織的に AT の活用を進めている。</p>		
2 委 員 会 研 修 会 で の 成 果 の 活 用	<p>本年度は以下の研究会や研修会等で AT に関しての普及や研究を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都肢体不自由教育研究会「アシスティブ・テクノロジー部会」における支援機器の研修会の運営 ・ 東京都心身障害教育学校情報教育研究協議会における AT の普及 ・ 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所「障害児者用日本語版高度シンボルコミュニケーション・デバイスと学校カリキュラム開発」にかかる研究協議会参加 ・ AT に関する国内最大の研修会「ATAC セミナー2005 東京」「ATAC カンファレンス 2005」講師 ・ 杉並区立こども発達センター療育ソフト評価委員 ・ 山形大附属養護学校研究会 講師 ・ 豊橋養護学校研究会 講師 ・ チャレンジキッズ研究会の運営 ・ 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所「平成 17 年度情報手段活用による教育的支援指導者の講習会の講師」 ・ 独立行政法人 教員研修センター「平成 17 年度 IT を活用した指導の拡充のための指導者の養成を目的とした研修 講師」 ・ 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所「肢体不自由のある子どもの指導及び支援に関する研究」に関わる研究協議会参加 ・ 特殊教育学会での研究成果の発表 		

<p>3</p> <p>成果を生かした研究授業等</p>	<p>日常的な学習活動に AT を活用しての指導をすすめている。事例としては</p> <p>(事例 1) 肢体不自由と視覚障害のある生徒に以下の支援機器を活用し学習の支援を行っている。</p> <p>1, コンピュータを使った学習支援</p> <p>① トラックボールを活用した入力装置の工夫</p> <p>② 本生徒に見やすい画面の拡大競っての工夫</p> <p>③ コンピュータの中に教科書や教材、ノートなどを入れることで主体的な学習を行えるようにする工夫。</p> <p>④ 文字を音声で読み上げたり、ルビを振るソフトの活用</p> <p>2, 使いやすくするための筆記具等の工夫</p> <p>① グリップを太くした鉄筆</p> <p>② 書見台の活用</p> <p>(事例 2) 病弱のために通学困難な訪問指導生徒のための学習支援</p> <p>1, ノートパソコンを活用した学習の補助</p> <p>ノートパソコンの中に学習の課題や補助資料などを入れて学習を行った。また、随時インターネットにつなげてインタラクティブに情報を収集し、生徒の学習意欲を高めることができた。</p> <p>2, テレビ電話を活用した本校授業への参加</p> <p>通学生とネットワークを活用したメッセージの交換やテレビ会議でのコミュニケーションを図ることで、学習の意欲を高め、コミュニケーションの広がりを実現することが出来た。</p>
<p>4</p> <p>今後の活用計画等</p>	<p>校内における活用計画としては、今後は支援室との連携し地域支援のための AT アセスメントを行えるようにするための教員の研修を行いたいと考える。</p> <p>また、校内の支援機器の整備と校内 LAN を活用しての情報の普及と整理を行いたい。</p> <p>また、個人的には研究の範囲を全国に広げ地域支援としての AT の活用についての全国の調査を行い、その課題について明らかにしたいと考える。</p>



書見台、トラックボール、拡大文字の活用